

石川県白山自然保護センター編集

## はくさん

第14巻 第4号



まがっど けやき  
曲戸の樺

ケヤキはニレ科の植物で、材に耐久性があり大きな板を得られやすいことから、古くから神社・仏閣などの大建築に用いられてきました。木目は美しく室内装飾用としても珍重され、木地師がよく用いたといわれています。樹冠は扇を半ばひらいたような特徴的な形をしており、落葉した後も他の樹木とはすぐ区別できます。曲戸の樺は吉野谷村の下木滑地区の国道 157号線沿いにあります。よく似た大きさのものが2本あり、昭和 47 年に村の天然記念物に指定されています。2本のケヤキのうち大きなほうは胸高周囲が 6.8m、樹高が 22 m、樹齢が約 300年といわれています。



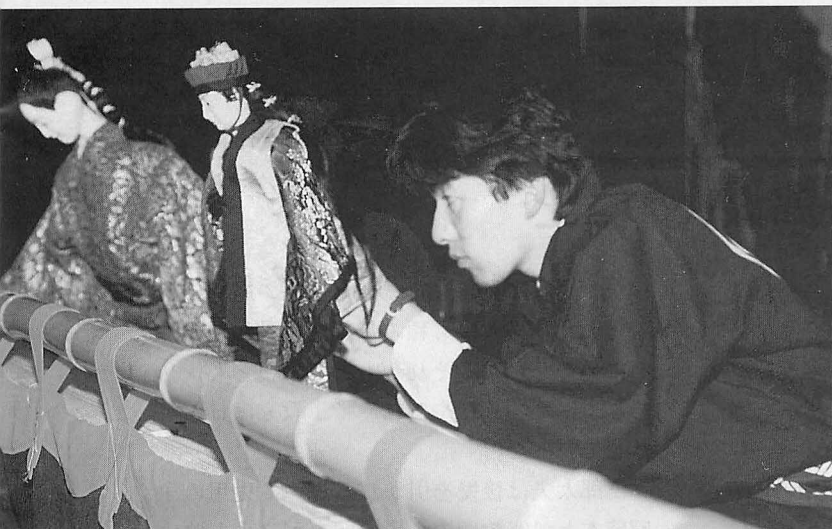
# 東二口 文弥人形浄瑠璃

上演演目は「門出屋嶋」

尾口村東二口の文弥人形浄瑠璃は今から 300年ほど前に京都より伝えられたといわれています。深瀬のでくまわしとともに、「尾口のでくまわし」として昭和 52 年に国の重要無形民俗文化財に指定されています（尾口村の深瀬地区は手取川ダムの建設によって水没し、現在住民の多くは鶴来町の深瀬新町に移転している）。演じられる出し物は明治の中頃までは 40 種近くありましたが、現在は「源氏烏帽子」「出世景清」「門出屋嶋」「大職冠」「姫山姥」「酒吞童子」の 6 種を残すのみとなりました。現在保存会の人達によって、毎冬 2 月の第 2・第 3 の土・日曜日に東二口歴史民俗資料館で上演されています。太夫の語り、笛、三味線、太鼓にあわせて演じられるでくの舞は、観る人の目を楽しませてくれます。

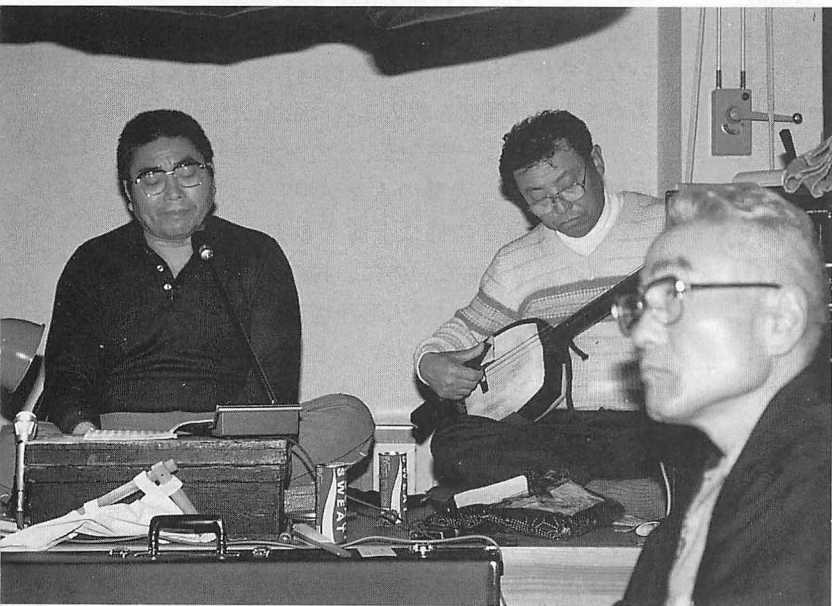


これらの“でく”は昭和40年代の後半まで使われていたものです。江戸時代からそのまま受けつがれたものもあります。現在、東二口歴史民俗資料館に保存。



“でく”とでくを舞う人は一体となり、それぞれの役を演じます。一人前になるには 10 年はかかったといわれています。

太夫の語り、笛、三味線、太鼓にあわせて、“でく”は舞われます。でくを舞う人の足踏みとともに、一種独特のリズムをかもしだします。





# 文弥の山里・でくまわし

北 出 甚 章

## 三郎太夫のこと

木枯らしにみぞれがまじっていた。大倉谷のほとりの天然杉の下に茅ぶきの庵を作り、寒さと飢でやせ細った身体は後いくばくもない。三郎太夫の脳裏を去来するものはなんであっただろうか知る由もない。

尾口村大字東二口の村庄屋<sup>りょうきよう</sup>了<sup>りょうきよう</sup>教<sup>りょうきよう</sup>家に生れた彼は利発な少年であった。家族のすすめもあり、学問をきわめるため希望に胸をふくらませて京の都に上ったのは明暦元年（1655）のことであった。当時としてはきわめてまれな事であったに違いない。当初は一生懸命勉学に励んだ彼であったが、その頃都で流行っている人形浄瑠璃を見ているうちにずるずるとその芸の魅力に引きずり込まれていった。人形浄瑠璃以外は頭になくなった彼は観劇では飽き足らず、ついに楽屋の中に入っていった。語りに合せての人形の操りや笛や太鼓に合せる足拍子は、やればやる程面白く又難しい。深みへ深みへとはまって行くのも当然であった。好きこそものの上手で、芸の奥技を修得するのも速かった彼は一座のかなめとなっていた。

その頃了<sup>りょうきよう</sup>教<sup>りょうきよう</sup>家では異変が起こっていた。一人娘のおらんが何者かにさらわれていなくな

った。巫女に見てもらったら伊勢の尾鷲にいと云う。村人にも頼み毎日捜し尋ねたがついに見つからず、それがもとで両親とも伏せてしまった。それやこれやで了<sup>りょうきよう</sup>教<sup>りょうきよう</sup>家は日々没落していった。

三郎太夫は後髪を引かれる思いで愛用の浄瑠璃本と 10 数個の人形の頭（デク）と共に我が家に帰って来た。まだ十才になるかならぬかの末っ子が、新しく庄屋となり隆盛であった表家<sup>おもて</sup>の下男となりどうにか飢をしのいでいた。それでも三郎太夫だけは村の若者達を集めて人形浄瑠璃を教えるのに余念がなかった。そのうちに一座の様なものが出来上り、近郷の村々から大勢の人々が押しかけて来て、ついに毎日の様に上演するようになった。木戸銭も入らないのに、村の大方の若者は仕事もそっちのけで人形浄瑠璃にうつつをぬかした。スターあつかいをされてもてはやされていた三郎太夫も、「あんなデクなど持ってくるから」とか「河原乞食」等とついに憎まれるはめとなってしまった。良家の娘さんや御婦人との艶聞も禍いして、彼が村より追放されたのは間も無くの事であった。

村を出て約一里程の道のりである。めった



に訪れたものもない彼の庵に、後日一人の村人が立ち寄った。そこには三郎太夫の冷たいむくろと手垢でよごれた浄瑠璃本が残されていた。享年 30 歳になっていただろうか、定かではない。

熱病の様に流行り貧乏神の様にきらわれた文弥人形浄瑠璃も、好きな者から好きな者へと細々と伝えられていった。いつの間にか誰がきめたともなく夏は炭焼・<sup>なまはた</sup>雑燵（焼燵）作り、冬は<sup>わら</sup>藁仕事に浄瑠璃の稽古と云う生活様式が出来上った。杉林や家屋敷までが賭けられ、一晩で行ききした大博打がすっかり影を

ひそめてしまった。それよりこの方、勝負事は一切しない村と云う事になって今日に至っている。

表家の下男をしていた三郎太夫の弟も、はじめに働いてどうにか村の北の端に貧居をかまえる事が出来た。代々太兵衛の名を嗣いだそう、私の祖父がその子孫にあたりますが何代目であったか解らない。爺さんもなかなかの声自慢の太夫（語り手）であったそうで、なかでも『<sup>かどいてやし</sup>門出八島』を得意としたそうだ。残念ながら一度も耳にした記憶がない。

## 私とでくまわし

たしか 5 才の時であった。祖母の背に負われて初めてでくまわし（人形浄瑠璃）を見に行った。それからというものは、朝から晩まででくまわしの真似をして遊ぶのが日課である。父が桐の木のコロで作ってくれた頭に棒を差し込み、横に棒をあてがい麻縄でしばりつける。それに自分の<sup>あわせ</sup>袷や袖なし等を着せれば出来上りである。オエ（居間）の一角についたてを置き、父が雪わらじを作りながら語ってくれる浄瑠璃に合わせ足拍子をとれば、丁度その下に芋穴がありトントンと一段と良い音がする。近所の友達も同様の人形をもって集まって来る。隣のお寺の住職さんもやって来て語ってくれた。お経の節が混じるので、一度も太夫座に上ったことのない住職さんもこの時とばかり大声を張り上げて語ってくれる。子供なりに役作りもでき、だいたいはその宿の息子が主役をやる。私も『源氏鳥帽子折』の藤九郎盛長や『門出八島』の嗣信をやるのが好きだった。二つ年下の弟はいつも雑兵役か切れ役で、ぶつぶつ言いながらまわしていたが、それでもなかなか根気が良い。なにかと言うと弟びいきの祖母が「たまにやかわってやれよ」とよくいったが、めったにかわってやらなかった。

分教場の休み時間にも、それぞれが手作りの人形を持ち出して一勢にでくまわしが始まる。そうなるこちらは机の上にあぐらをかいて太夫に早替りである。勉強はたいしたこととはなかったが、ことでくのこととなると皆一目置いてくれた。他部落の友達がからかい半分で真似るのがすごくはがゆかった。

太平洋戦争が始まり村の青年達は次々に応召され、ついにでくまわしも出来なくなった。そうして終戦後間もなく、復員してきた青年達が毎晩父の所に浄瑠璃の稽古にやって来た。父も非常に喜び同じ文句で同じ節のところを三晩でも四晩でもくり返す。そうなる当人達よりそばで聞いている方がいささか閉口する。母だけが餅を焼いたりお茶のおかわりをしたりしていやおうなしに付き合わされていた。村の青年達が朽ち果てた分教場の広間に「<sup>ともし</sup>巴と輪ちがい」の紋入りの高幕をはりめぐらし、人形に衣装をつけ太刀や弓矢に銀紙を貼っていた。「でくまわしだ」、私はこおどりにして喜んだ。一人の若者が荒縄でしばりつけた太鼓を私の首にぶらさげた。ドンドコンドコ鳴らしながら村中を歩きまわった。「今夜でくまわしだぞ」と云うふれ太鼓である。

## でくまわし

いよいよ旧正月 7日夜半『式三番叟』につづき、笛太鼓・足拍子も高く初日の出し物『源氏烏帽子折』が上演された。11日、15日・16日、19日にはそれぞれの芸題が舞い納められた。そして 20 日千秋楽、胃潰瘍が日々に悪化して食事も出来ず海老の様な格好で寝込んでいた父が太夫座に上っていた。よほど苦しかったのか、物凄い形相で語り続けた五段目が終わった時には、そのままその場にうつ伏しになったまま翌日入院。ついに帰る事が出来なかった。

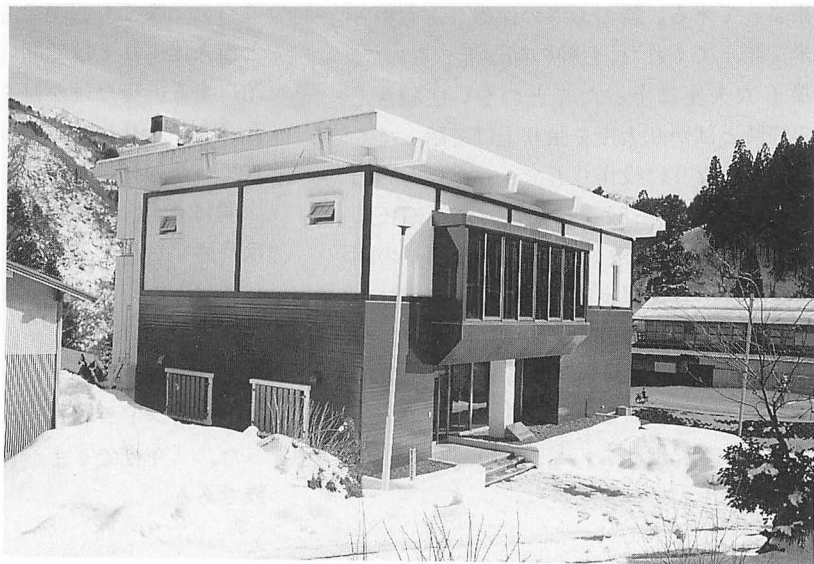
よれよれな浄瑠璃本を手にする度に当時の事が思い出される。中学を終るなり父が残した『源氏烏帽子折』の本を懷中に故土井下七左エ門爺の門をたたいた。爺さんも大変喜んでお前の声は浄瑠璃にもってこいだなどとお世辞を云いながら教えてくれた。毎晩夜の 2 時 3 時と、たき火が燃えつきていろりの中からミミズが出そうになる迄やる。音も無く降り積った雪が二尺余りもあり、どのあたりが道かわからず往生した事も二度や三度ではなかった。この様なくり返しをしている内に春が訪れる。浄瑠璃本ともしばしお別れである。炭窯をつくりながら窯木を切りながら、人気の無いのを幸に大声で語る。民謡も歌謡曲も浄瑠璃にはかなわない。そして最後の窯出しが終れば 12 月 9 日山の神に感謝をする

山祭である。夏じゅう木を切るのに使ってきたヨキ・ナタを床間に置いて御神酒を供える。油あげやぜんまいの煮しめで一杯やる。村人が山仕事に出られない様に適当に雪も降り始める。お七夜の報恩講が過ぎればそれこそ本格的な稽古通いが始まる。どこもかしこも寝静まった真夜中、藁で作った深靴をはき我が家に向かえば、今し方降った雪に猫の足跡だけが梅の花の様に点々とついている。『常盤御前』の伏見下りの情景等が連想され、遠く平安源平の世に迷い込んだ様な幻想にかられる。

そんな文弥人形浄瑠璃も昭和52年に国の重要無形民俗文化財の指定をうけた。東二口の集落のほぼ中央に建てられた舞台付の資料館で毎冬上演している。数少ない子供達が浄瑠璃なんか口にせず、テレビマンガの主題歌やコマーシャルソングを歌いながらスクールバスに乗りこんで行く。文弥の里もずい分変わったものだ。「福ら雀の羽をなやみ、雪に折れ伏篠竹の世に一夜の仮の宿」。父が好んで口にした一節である。私も時折り語って見る。きっと私のところに習いに来てくれる人はいないだろう。多忙な毎日ではあるが一抹の寂しさを禁じえない今日此頃である。

＜東二口文弥人形浄瑠璃保存会＞

尾口村東二口歴史民俗資料館。「でくまわし」は毎冬ここで上演される。昭和 51 年に建設



## でくまわしに関連して

花井 正 光

拝啓 Mさん

今冬は例年になく暖かきで、東京ではいつもの年より梅の開花がずっと早く、すでに桜の蕾が少し膨みはじめたかにみえるほどです。聞くところでは、白山麓の雪の少なさも異例のこととか。幾つかあるスキー場も今シーズンばかりはお困りの由、気の毒なことです。

さて、2月も20日を過ぎている今頃は、恒例のでくまわしももう済ませられたことかと思えます。毎年、この時期になるときまって、雪深い東二口で観せてもらったでくまわしの記憶が妙によみがえってきます。寒の最中の行事だったからでしょうか。

白山麓で暮していた頃には、折々にMさんを訪ねては、クマ猟の話や焼畑、炭焼きの話など興味深く聞かせてもらったものでした。自然と人が強く結びついた山里の暮らしがほんの最近まで白山麓には残っていたことを知って、体験のまるでない自分にも、白山麓がずいぶん身近に感じられたことでした。

でくまわしにしてもそうでした。人形のかしらや衣装、ぎこちなく映る人形のしぐさ、にわか仕立ての高幕式の舞台など、どれもが素朴ながら、観客のなごんだ雰囲気もあって、初めて観る者の目にもひどく親しめるものでした。そしてまた、雪深い山里で長らく育まれてきた郷土芸能の歴史が、素人目にも感じとれました。

ところで、そのでくまわしのことですが、つい最近、用務で出掛けた鹿児島で、文弥節人形浄瑠璃と呼ばれる郷土芸能があることを知りました。偶然とは言え、文弥節を伴奏にしていた東二口のでくまわしを思い出し、その類縁性が気になり、丁度、仕事で県立図書館へも行くことになっていたのも、司書の方いたので資料を紹介してもらいました。ところは、薩摩半島の付け根辺りに位置する東

郷町の斧淵<sup>つぎふち</sup>。元禄時代からの伝来で、京都・大阪方面で演じられていた文弥節の人形芝居を移入したとの口承がある。いわゆる古浄瑠璃と総証されている文弥節、のろまを語り物にしていること。演目は初期の近松物であること。現在もどうにか保存されていることなどが、ざっとした薩摩の文弥人形についての概要です。それから、隣の宮崎県の山之口町という町にも文弥節を伴奏とする人形芝居が伝わっていること。こっちの方は江戸時代の末に薩摩から伝えられたとされることも併せて知ることができました。

出張先で偶然出合った二つの文弥節人形芝居が、遠く離れた白山麓のでくまわしとよく似ていることが不思議でもあり、ちょっとした探求心をくすぐられたというわけです。

Mさんにもいつかお話したかと思いますが、人形芝居といえば文楽のことぐらいの認識しかもっていなかったのに、様子の全く異なる東二口のでくまわしを観たときは、両者の違いの大きさに驚かされました。それでも、その時点では、文楽の地方版ぐらいだろうと特段気にせずにいたのが、思えば軽率なことでした。昭和52年のことだったでしょうか、そのでくまわしが深瀬のでくまわしとともに国の重要無形民俗文化財に指定されたのは。その時になってはじめて、文楽のまがいものどころか、たいへん貴重な民俗文化財であることを知らされたのでしたから。ろくに調べもせずに既成の概念でものをみてしまうことを反省させられたことでした。

そんなことがありましたから、今度は少しまじめに調べてみました。その結果、東二口と深瀬のでくまわしは全国でも第一級の貴重な民俗文化財だということが改めてわかったので、Mさんにもそれを伝えたくてお手紙を差し上げた次第です。

人形にまつわる国指定の重要無形文化財は



# でくまわし

同封の一覧のとおり9件だそうですが、全国には今でも各地で相当多くの人形芝居が郷土芸能として伝わっているようです。別に添えた図をみてくだされば、その数の多さ、分布の広さがよくわかっていただけると思います。図は人形芝居についての第一人者である永田博士の大作にあったもので、見やすく改変してあります。記号が6種類あるのは、一口に人形芝居といっても、人形の操り方や語り物の種類、起源と歴史といった点でさまざまであるからです。また、人形戯として人形芝居と分けてあるのは、前者はその起源も古く、物語りを欠く点で人形芝居の祖型とみなし区分されているもので、東北地方に多い「おしらさま」と「くぐつ」がこれにあたるそうです。一本の棒に顔と胴が刻んである簡単な棒人形を操るのが特徴です。

三人遣<sup>つかい</sup>と一人遣の記号も広く分布しているのがわかります。義太夫節を伴奏に3人で人形を操る文楽式が三人遣です。近松の浄瑠璃の人気と相まってか、江戸時代中後期全国に広まった結果、人形芝居を代表するものになっています。この人形芝居の盛行に刺激されて明治を迎える頃に考案されたのが一人遣だそうで、指人形など1人でも操れるよう工夫され、文楽を簡素にして演じたもののようです。

さて、古系一人遣とあるのが東二口と深瀬のでくまわしや先の鹿児島・宮崎の文弥節人

形を含む人形芝居です。佐渡ヶ島にも伝えられていることが図に示されています。文楽以後に生れた新しい一人遣と区別するため古系一人遣とされています。義太夫節より古い文弥節、説教節、のろまなど古浄瑠璃と称される語り物を伴奏とすることから、古浄瑠璃系人形芝居とも呼ばれているようです。義太夫節と三人遣による文楽形式より古い人形芝居であり、今では5ヶ所にしか遣<sup>のほ</sup>されていないことから、民俗芸能史上、貴重視されているといえます。

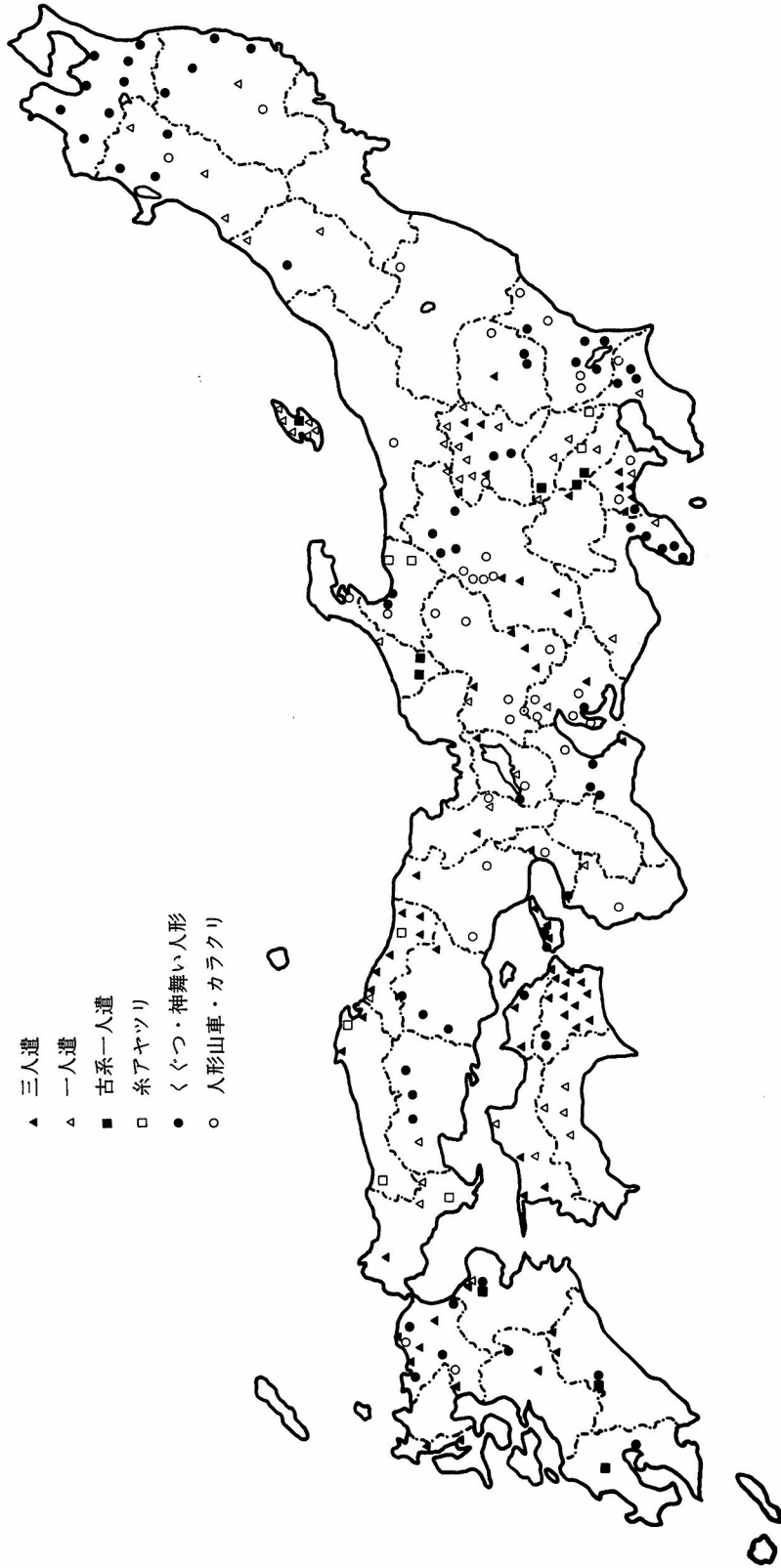
人形芝居の多くが、村や町の近代化につれて衰退を続けるなかで、白山麓のでくまわしがよく保存されてきたことは、村落共同体の団結を図る機能をこの郷土芸能が発揮してきた証拠でもあり、それ自体高く評価される民俗文化財といえそうです。数ある人形芝居のうちから重要無形民俗文化財の指定をうけていることが、何よりもそのことをよく語っているように思います。

偶然に出合った文弥節人形がきっかけで、白山麓のでくまわしとよく似た人形芝居のこと、文弥人形とその他の人形芝居の相違点など知ることができました。そして、白山麓とでくまわしの里、東二口とそこに住んでみえるMさんが改めて見近に感じることもできたのはラッキーでした。

どうぞお元気でおすごしくださいよう  
に。 <文化庁 記念物課>

重要無形民俗文化財に指定された人形芝居・人形戯（昭和61年8月現在）

人形芝居・人形戯名	所在地	保存会名	文化財指定年月日
相模人形芝居	神奈川県厚木市、小田原市	相模人形芝居保存会 林座 長谷座 下中座	昭和55年 1月28日
佐渡の人形芝居（文弥人形、説経人形、のろま人形）	新潟県両津市、佐渡郡	佐渡人形芝居保存会 佐渡文弥人形振興会 新穂村人形保存会	昭和52年 5月17日
尾口のでくまわし	石川県石川郡鶴来町、尾口村	深瀬木偶廻し保存会 尾口村東二口文弥人形浄瑠璃保存会	昭和52年 5月17日
真桑人形浄瑠璃	岐阜県本巣郡真正町上真桑字本郷	真桑文楽保存会	昭和59年 1月19日
安乗の人形芝居	三重県志摩郡阿児町安乗	安乗人形芝居保存会	昭和55年 1月28日
淡路人形浄瑠璃	兵庫県三原郡三原町	財団法人淡路人形協会	昭和51年 5月 4日
八女福岡の燈籠人形	福岡県八女市	文化財福岡燈籠人形保存会	昭和52年 5月17日
八幡古表神社の傀儡子の舞と相撲	福岡県築上郡吉富町大字小太丸	細男舞保存会	昭和58年 1月11日
古要神社の傀儡子の舞と相撲	大分県中津市大字伊藤田字洞ノ上	古要傀儡子保存会	昭和58年 1月11日



主な人形芝居・人形戯の分布図(永田(1979)「日本の人形芝居」をもとに作成)



# 白山麓の焼畑 アラハタカブラ・エドカブラへの視点

橘 礼吉

## 白山麓の焼畑を照葉樹林文化の枠内でとらえる視点

滅びゆく日本の焼畑に光をあてたのは、中尾佐助氏が『栽培植物と農耕の起源』（1966）で述べられた「照葉樹林文化論」です。日本の稲作以前の農耕の源は、四国・九州の焼畑山村に伝承されてきた生活様式に求められるとし、ヒマラヤ山麓や中国雲南地方、西南日本にひろがる東アジアの照葉樹林帯に、共通した文化要素が連なっているとする考えであります。そして佐々木高明氏は『稲作以前』（1971）で白山麓の焼畑に対し、照葉樹林帯の焼畑が冷涼気候に適するヒエ・アワを作物にとりいれ、落葉樹林帯へ適応したものとする視点をあてられたのです。その証拠として「カマシ」とよばれているシコクビエは、原産地のアフリカのサバナから東へ東へと華南・日本列島へ、そして豪雪地の白山麓へと伝わってきたと指摘されました。

今は加賀市に在住の伊藤常次郎氏や白峰村の出作りの方々とおつきあいをしてきた中で、白山麓の生活について、照葉樹林文化の枠では理解できないことが幾つかでてきました。焼畑ダイコンと焼畑エドカブラは共に、秋の涼しさとよく太り、またエドカブラは初霜・初雪にあってもさらに育つ等の特性をもっています。この焼畑作物は、温暖な照葉樹林帯を経て白山麓へ伝わったとは思えません。白峰村の農地は、約4か月間完全に雪に被われます。長い冬ごもりに備え、大量のダイコン・カブラの漬物をしこみ、多くの野菜を地下穴に貯える生活は、雪や寒冷気候と結びついた北方系の文化要素です。



## なぜかアイヌの野菜を白峰村で作る事実

昭和45年、藤部与三氏（故人）の出作りで「エドカブラ」に会って以来、多くの農業書をひもといても、その正体は不明でした。このカブラの根は、球型・卵型・紡錘型・とっくり型と種々雑多で見事に不ぞろいで、また独特の甘味をもっています。56年、青葉高著『野菜』という本で、エドカブラの根と同じ写真に出会い、この野菜は「ルタパカ」別名「スウェーデンカブ」であることが分かったのです。この野菜は、北海道日高支庁平取町のアイヌは「アタネ」と呼びアワ種と一緒に、また岩手県北上山地では「センダイカブ」と呼びヒエ種と一緒にまいています。驚くことには白山麓・北海道・東北のスウェーデンカブは、三地方で呼び名は違うのですが栽培方法が同じく、ヒエ・アワ等の雑穀と一緒に種をまき、雑穀を刈った後もスウェーデンカブは畑に残し、晩秋の冷涼気候で成長させてから収穫するという農法です。そして白峰村のエドカブラは、日本列島のスウェーデンカブ作りの南限地であることが分かったのです。

## 白山麓の焼畑カブラの遺伝子は「北」を

青葉氏はさらに、カブラの遺伝子を資料にユニークな野菜のルーツ論を主張されたのです。カブラの種の表皮に注目し、種皮遺伝子を分類すると、アジア大陸系の遺伝子をもった「洋種系」は琵琶湖以北の東日本に、日本固有の遺伝子をもった「和種系」は西日本に二分して分布することを発見されました。そして洋種系と同一遺伝子のものが中国・シベリアにあるので、東日本の洋種系カブラは朝鮮半島北部やシベリア沿海州より、東日本日本海側に伝わった可能性が強いとのべられています。この青葉氏の提唱は、日本の稲や野

白峰村浦伊ト氏栽培のエドカブラ（スウェーデンカブ）と北海道平取町見沢正氏栽培のアタネ（スウェーデンカブ）（写真右）。





河内村直海谷川クワバラ谷のヘイケカブラ、葉はダイコンのように切れこみがあり、裏に粗いトゲをもち、地面にはいつくばるようになる。

菜は中国・朝鮮半島よりまず九州に伝わり、次第に東進したとする一元的な南方ルーツ論を否定した立場であります。

かつて白山麓の焼畑では、火入れ初年目にヒエとアラハタカブラ（時にはエドカブラも）の種を混ぜて播きつけていました。アラハタカブラとは在来種の焼畑赤カブラで、種が現存しておれば、遺伝子が鑑定できそのルーツが解明できるのですが、絶えてしまったので口惜しい日々が続いていたのです。

ある時、山友達同志で各自が料理材料を持ち寄り手前料理を作って「一杯」やることにしました。私は、日本的に珍奇な野菜白峰村のエドカブラと、桑島堅豆腐を持ちこみました。ところが、エドカブラと同じものが河内村直海谷源流に野生化していると、友人が教えてくれたのです。早速駆けつけると、河川敷や林道脇に自生化していたのは、エドカブラではなく野生化した焼畑カブラだったのです。『野菜』という本に会って以来、探し求めていた焼畑カブラを58年11月5日遂に探しあてたのです。

河内村奥池の池田すぎ氏（故人）によれば焼畑カブラは「イジワルカブラ」といい、焼畑でアワ種と一緒にまいたこと、根も葉も菜種も食べたこと、さらに内尾の内藤長松氏によれば内尾では「ヘイケカブラ」といい、焼畑は三八豪雪頃にやめたがその後、焼畑カブラは、人の手を借りずに自生していること等が分ったのです。翌年、青葉氏に種皮遺伝子の鑑定とさらに自生地現地調査をしていただき、この焼畑カブラは洋種系の原始性の強い品種であることが解明されたのです。要約すれば、白山麓の焼畑カブラは種皮遺伝子より洋種系と分り、その時点で白山麓の焼畑カブラは日本海対岸の東北アジアの農業へと連なる可能性が強くなったのです。

## 焼畑で根菜と雑穀をセット栽培する農法のひろがり

白山麓の焼畑では、火入れ初年目にヒエと赤カブラを混ぜあわして播き、さらにエドカブラを混ぜる時もありました。能登半島の焼畑では、ソバとカブラを混ぜて播き、福井県池田町では焼畑の上部にソバ、下部にダイコンを分けて播いていました。山形県温海町では焼畑上部にソバ、下部にカブラを播きつけました。北海道日高地方のアイヌは、アワとスウェーデンカブを混ぜて播いていました。同じ畑地に根菜と雑穀を混ぜあわして播く農法も、同じ畑地内に根菜と雑穀を別々に作り分ける農法も、結局同一畑地で二つの農作物を並行して作る技法で、本質的に同じものと考えられます。このような根菜と雑穀のセット栽培事例は、濃越山地・白山麓・能登半島・飛越山地・頸城山地・佐渡島・上越山地・朝日山地の各焼畑、さらに北上山地・北海道日高地方の畑地に分布していることが分ったのです。

この焼畑による根菜と雑穀のセット栽培を二つの視点で考えてみましょう。第一は、ソ

白山麓の焼畑でのアワと  
エドカブラの混播栽培（小  
松市小原地内）。



北海道平取町小平のアタ  
ネ栽培。現在はアワと混播  
していない。トウモロコシ  
の左がアタネ。



バとカブラ（ダイコン）、ヒエ（アワ）とカブラの組合せは、焼畑民が長年、多種類のセ  
ット栽培の試行錯誤の末に生まれたものではなく、最初からソバとカブラ、ヒエとカブラ  
が既成セットで日本へ伝わってきたと考えたいのです。第二はセット栽培の分布地域は、  
日本の深雪地域と重なり、また洋種系カブラの分布地域とも重なっています。二つの視点  
と、洋種系カブラの遺伝子は東北アジアへ連なること、ソバの原産地はバイカル湖周辺で  
あることを総合すると、白山麓の焼畑で根菜と雑穀を混ぜて播く農法は、東北アジアの北  
方系農業の流れをくんでいると位置づけたいのです。そして焼畑根菜は、長い冬ごもり  
の食生活で漬物や貯蔵野菜として、重要な役割を果たしてきたのです。

## 白山麓は“山の正倉院”

中尾佐助氏は『日本農耕文化の源流』（1983）の中で、かつて東北アジアに北方系農作  
物で成立した農耕文化が存在したと考え、照葉樹林文化に対し「ナラ林文化」とよぶこと  
を提唱されています。このナラ林帯の代表的農作物は、W型大麦（脱粒を防止する遺伝子  
のうち西欧型）、有毛の燕麦<sup>えんぱく</sup>、洋種系カブラ、カラシナ、ネギ、ゴボウ等です。またこの  
文化は、稲作以前に東日本に伝わると同時に、アルタイ語系の言葉も伝えたと説かれてい  
ます。

白山麓や東北地方北上山地、北海道日高地方のスウェーデンカブ（ルタバカ）も、ナラ  
林帯経由で伝わったことは、ほぼ間違いないでしょう。白峰村の焼畑には、南方ルーツの  
カマシ、さらに北方ルーツのエドカブラ・アラハタカブラが混ざりあって作られていたの  
です。言葉をかえれば白山麓は、照葉樹林文化とナラ林文化すなわち南北二つの農耕文化  
のターミナルなのです。この意味で、白山麓の焼畑は“山の正倉院”であり、貴重で文化  
財的な農作物が作り続けられてきたのです。

<石川県立歴史博物館>





ブナオ山とブナオ山観察舎

# 白山の 自然観察会 に親しんで

西 野 文

白山自然保護センターは、親子が参加する「白山の自然観察会」を年に4回開催している。私達は「白山の自然観察会」のファンになってもう五年目——。「自然観察会」は、我家には待ち遠しい行事となっている。

「自然観察会」に参加したおかげで、その土地の歴史や動植物などについて知識を深め、四季を野山で学ぶ喜びや、自然保護についても知るようになった。念願の「あの美しい女官のような頂き」、石川県の最高峰へといざなって下さったのも観察会であった。雪崩の危険が伴う冬山での野生動物の調査は、大変なご苦労と推察するが、その結果を観察会で聞かしてもらうのも楽しみの一つ。なかでも高山の植物、野鳥、野生動物の生態などの観察では、子供達は熱心にメモをとっている。手取川ダムのプランクトンの観察、先人の知恵の焼畑農業や出作り小屋の見学、わら草履作りの体験、さらにブロッケン現象が見られた白山登山など、白山一帯の大自然から

のメッセージにふれられた事に、参加した誰もが感動を覚える。私はこの感動をエッセイにしてラジオや新聞に出しているが、素晴らしい観察会をもっといろんな人達に知ってほしいと願っている。

子供達は白山を愛しているさわやかな五人の普及担当の方々を、イヌワシ先生、火山先生、オオルリ先生、テン先生、カモシカ先生といった白山の野生動物のニックネームを付け親しんでいる。とりわけ、ぜん息気味の小学校五年の真理にとって白山の大自然は、心身共に大きな励みとなっている。県の野鳥通信員になったり、郵政省の作文コンクールでは観察会の事を書き二年連続入選、夏休みの研究も白山と決め、彼女が観察会に参加したことを喜んでいる。むなしい自然破壊、自然の大切さを教えるのもセンターの指導のひとつ。毎回ひとつでも学びとるよう心がけている。



望遠鏡で動物たち  
を観察する参加者

先日参加した「冬の自然観察会——春を待つ野生動物を追って——」の様態を中継してみよう。

「あっ、カモシカの足跡だ！」

「こっちはウサギのフンだよ——」

「ほら、雪の上にセッケイカワゲラも日なたぼっこしているぞ。」

一里野スキー場より少し入ったところの林は、ブナオ山観察舎へと急ぐ親子の歓声で沈黙が破られた。例年だとロードミラーもすっぽり雪に埋もれてるのに、丸い顔をキョトンと出しているのが何とも滑けい。まさに暖冬を証明しているようだ。尾添川の谷あいを通り、長い尾のヤマドリが飛来する。対岸の雪崩の音にも、息を潜めた木立の間から聞こえるコゲラのドラミングやゴジュウカラのさえずりにも、春の鼓動が手に取るよう。

1,365メートルの壮大なブナオ山を真正面に一望出来る観察舎に着くと、皆、先を競って望遠鏡へ——。

「いるいる、子ザルがブランコしてる。」

「カモシカがこっち見てるよ。」

思わず誰かれとなく口を突いて出る。アザミやウドなどの高茎草原の山腹では、親子のカモシカが木の皮をむしり食べている。向き

をかえると急斜面にポツンと一頭、動く気配がない……春を待ちこがれているのか。木立に群がるニホンザルの親子の背には、いつものつらく長い冬と違い、今年の思いがけない少雪のゆとりが感じとれる。

ウシ科のカモシカの二本の角は雄雌共にあり一生はえかわらないが、角につかれて死んだという一本角のハク製が痛ましい。「二本あるからニホンカモシカ」とユーモアをまじえたお話。最初の冬で子供は半分は死んでしまうお話や、谷落しの子離れの儀式的の説明で、厳しい野生の試練を知った。植林の被害でニホンカモシカを殺す県もあるが、約三千頭もいる白山は幸い母なるブナの原生林に守られ、平和に暮らしているので安心だ。四月には穴から子供をつれたツキノワグマも出て、山はさらに賑わうだろう。周辺に足跡はあれど姿を見せないカモシカを忍者のニン君、森繁に似ているのでシゲさんと名付けてる下家先生のゆかいなお話に、時の経つのも忘れる。イヌワシを見られず心残りだが、大自然の生き生きとした野生動物の営みに、心が洗われたような一日だった。

毎回すばらしい観察会をありがとう。

<金 沢 市>

## たより

吉野谷村木滑にある本庁舎周辺は例年なら 4月中旬頃まで雪が残っていますが、暖冬のこの冬は谷あいや日当りの悪い斜面を残して、もうすっかり雪は姿を消しました。雪解けのあとからフキノトウがあちこちに顔をだし、春も間近です。

国の重要無形文化財に指定されている「尾口のでくまわし」が、2月の14・15日と21・22日の土・日曜日に東二口で上演されました。地元民の冬の楽しみのひとつであるこの民俗芸能に、最近では街から多数の人が観劇にでかけてきてにぎわっています。素朴なでくの舞に現代人にも通じるものがあるようです。本号では、東二口文弥人形浄瑠璃保存会の北出甚章氏と文化庁の花井正光氏に「尾口のでくまわし」についてご投稿いただきました。橘 礼吉氏の『白山麓の焼畑アラハタカブラ・エドカブラへの視点』は、白山麓に栽培されているカブラの種類をとうして、白山麓の生活のルーツを探ったものです。

冬の自然観察会が 3月 8日に一里野のブナオ山観察舎で開催されました。ブナオ山観察舎での動物観察は、例年の行事のようになりましたが、センターの観察会にはたびたび参加をしていただいている西野文さんに、観察会の感想を書いていただきました。

ブナオ山観察舎の「パンフレット」と「ウォッチング・ノート」が新しくできあがりました。「パンフレット」はブナオ山観察舎とその周辺の自然をカラーで解説したもので、動物たちの観察の仕方や見分け方など観察する際に手助けとなるのが「ウォッチング・ノート」です。どちらもブナオ山観察舎に常備してありますからご利用ください。

白山地域自然保護懇話会が 3月 18日に開催されました。今回は白山地域の治山事業と砂防事業について、建設省と営林署から話題を提供していただきました。この会も今年度で 10 年目になり、これからも地域に密着した話題を取り上げていくつもりです。

## 目 次

表紙 曲戸の櫓	1
東二口 文弥人形浄瑠璃	2
文弥の山里・でくまわし	北出 甚章 4
東二口のMさんへの手紙——でくまわしに関連して——	
	花井 正光 7
白山麓の焼畑アラハタカブラ・エドカブラの視点	
	橘 礼吉 10
「白山の自然観察会」に親しんで	西野 文 14
たより	16

はくさん 第14巻 第4号 (通巻62号)

発行日 1987年3月25日  
 発行者 石川県白山自然保護センター  
 石川県石川郡吉野谷村木滑  
 〒920-23 Tel 07619-5-5321  
 印刷所 株式会社 橘 本 確 文 堂